篇として後者のうちの一章「隋唐時代に於ける支那文物の西漸」が加へられ、なほ參考書目が附けられてある。

最後の「長安盛夏小景」は、はじめ東京日日新聞にのせられ、日本大學の「東華」に轉載せられたとのことで、氷柱の話とか涼棚とかメロンとか、都人士の夏の生活ぶりが談話體で述べられてある。

本書全體について特に述べねばならないことは、こみいつた考證は著者一流の流麗な行文のかげに隱されてゐて、外見は一向固苦しくないことで、一般讀者の讀みものとしても不適當ではない。このことは「日本古書通信」の近着號の「ハガキ回答」欄に『近頃興味深く讀んだもの』として本書の名を擧げてゐた專門外の人が二、三あることによつても證されるであらう。(昭和十六年四月二十二日創元社發行、菊規格版二二三頁、附圖二葉、二圓三〇錢)

(藤枝晃)

獨逸に於ける猶太人問題の研究

菅原憲著

「故國を去つて二千年、流離放浪の歲月を重ねながら民族的特質を失はず傳統的矜恃を棄てず今尙儼然たる猶太人の存在は世界史上の一異觀と云はねばならぬ」と著者はその序の冒頭に於て述べてゐられるが、寔に、先頃盟邦ドイツを追はれた夥しい猶太人が安住の地を求めて逃避行を續け、シベリアを經由して、或は敦賀に或は上海に不安な落魄の姿を現はしたのは我々の記憶に新なる所であらう。然し亦一方では、現今の如く戰亂が文字通り全世界に擴大するにつれて、戰爭は金權猶太人の製造する所なり人類の敵、猶太人の謀略こそ討つべしとの喧々囂々たる叫も屢々耳にした事である。勿論我が國に於ても猶太人問題は識者の間で注目せられ、既に數多の書物も上梓を見たのであつたが、いづれも唯猶太人の謀略のみを衝くに急であつて本格的な研究の未だ見出だされないうらみがあつた事は否定出來ない。

猶太人は、云ふ迄もなく、歐洲各地に移住して後、他と沒交渉に唯彼等だけで生活してゐたのではなかつた。彼等は歷史的存在として、ヨオロッパ文化の光彩する所、各々特定の國家に屬し、その國家と、廣くはその國の文化との交渉に於て生活し續けて來た事を思はねばならない。從つて猶太人の理解に於て從來往々見られた如き時と國家を無視した猶太人一般は一個の抽象に陷るであらう。西洋史の權威にして本問題に多年研鑽を重ねられてゐる著者が猶太人一般ではなく「獨逸に於ける」猶太人問題を取り上げられた所以も推察し得ると共に眞に歷史的具體性を持つた多年の研究の成果を世に送られた著者の勞苦に對し感謝の意を表する次第である。

本書は第一章古代の希伯來人。第二章中世獨逸の猶太人。第三章中世末期から近世の初期まで。第四章近世の初期から獨逸統一まで。第五章第二帝政時代。第六章世界大戰及び其の以後。の六章より成り立つて居り、その內容の詳細なる紹介は爲し得ないが、第一章から第四章迄はどちらかと云へば「メンデルスゾー

ン」自身の記錄が雄辯に物語つてゐる(頁一三五―一三六)樣に、悲慘な迫害の歷史と云つてよく、第五、特に第六章に致つて始めて社會のあらゆる分野に滲透せる猶太人勢力の活躍が書かれてゐるのであつて、第六章の革命と猶太人。ナチの擡頭等の項目は動きつゝある現在に直接するが故に特別に興味深く讀まれたのである。結局「盟邦獨逸は何が故に猶太人を排斥するのか」の問ひに對し、微に入り細を穿つた精緻極まる研究で以て此の歷史的宿命を分析し解明してゐられるのである。一朝一夕にならなかつた、なみ〳〵ならぬ著者の努力に對して敬意を表し度い。

就中本書の特色とも云ふべきは單に猶太人の迫害・活躍が唯、年代順に連結されてゐるのではなく獨逸史否、更にはヨオロッパ世界史の高き展望の下に展開されてゐるのであり、西洋史に對する著者の深き造詣が到る處滲出して、此の點本書の價値を一層高からしめてゐるのである。

之を要するに本書こそは、かつは結び、かつは消え去るうたかたの如き世上に散見される御座なりの際物ではなく後々猶太人問題が論ぜられる場合、必ず引き合ひに出さるべき文化財として永くその生命を保持するであらう。敢へて江湖に推薦する次第である。(日本評論社發行、定價四圓五拾錢)〔豐田堯〕

Ernst Buschor, Griechische Vasen. 1940

ギリシアの壺がギリシア陶器の代表であり、またその勝れた形狀と壺繪とによつてギリシア美術史の內に重要なる地位を占めることは言ふ迄もない。それが美術品鑑賞品として蒐集され愛玩されたことは古來より今日に至る迄變らず、近代學者の努力の一つも亦作品の鑑定にそそがれてゐる。しかし鑑定といつても作者の決定――作者名のあるものは比較的少い――のみならず、時代と製作地方の決定であるが、それには形狀――全體の印象の外、胴張りや口や脚の比例――や畫題や畫法を先づ時代的に地方的に特色づけねばならない。この努力の第一歩として作品集や目錄の發刊があつたし、また現に進展しつつある。

しかしかかる努力は一方においては全體的なギリシア精神の展開によつて裏付けられねば、それは動搖し論議され得る印象的なるものに墮する危險がある。ここにギリシアの壺の研究はギリシア美術史のみならず、ギリシア精神史にかかはる。しかもこのためにはギリシアの美術品中最も多量に殘るものであるから、最も系統的な展開を辿り得るし、またギリシア人にとつても必して日用什器以上のものであつたがために、我々はこれ等を通じて時々のまた所々のギリシア人の努力の目標を捕へ得るのである。――勿論この外、壺は歷史事件、神話學、宗教學の資料となり得るが、この場合はそれに觸れずともよい。

ブショウの意圖は以上のところにあると私は思ふ。彼の著Plastik der Griechen, 1936. は彫刻によつて抽出されたギリシア精神の展開であるのに對し、本書はギリシアの壺によるそれであるといへよう。彼には既にGriechische Vasen Malerei, 1915. が